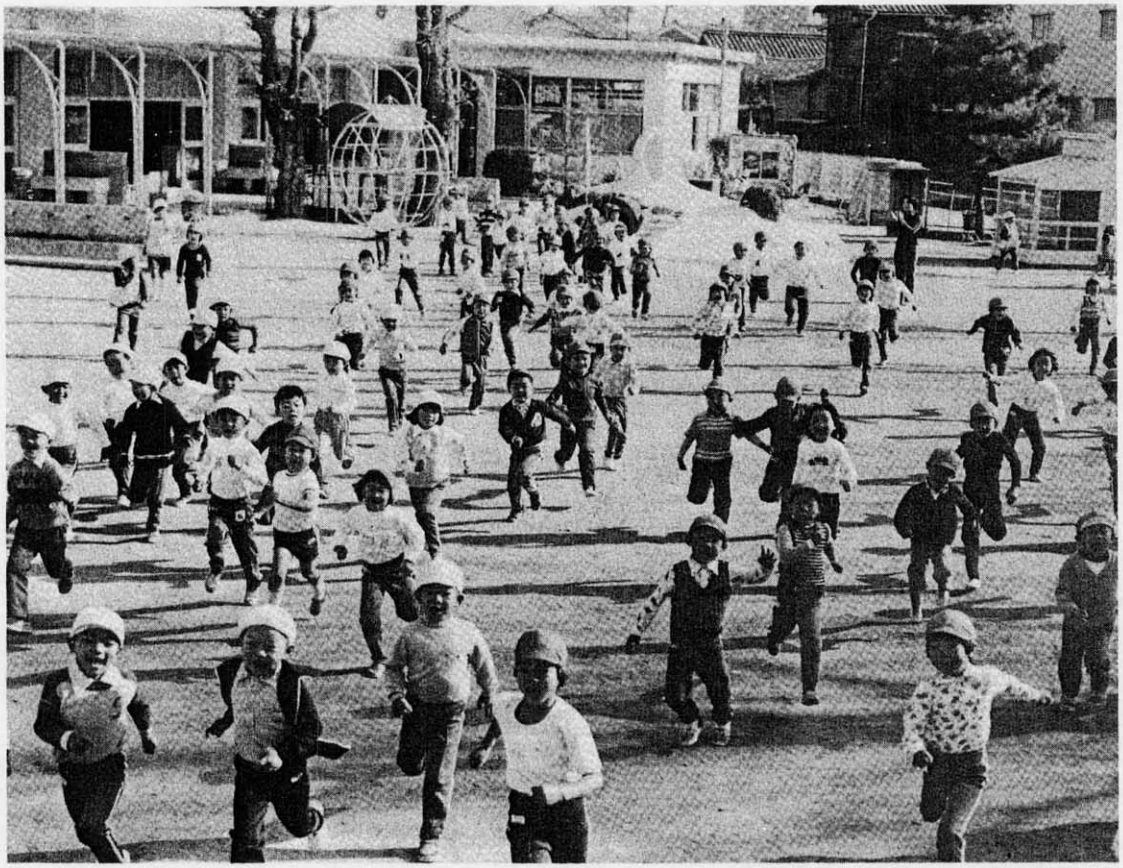
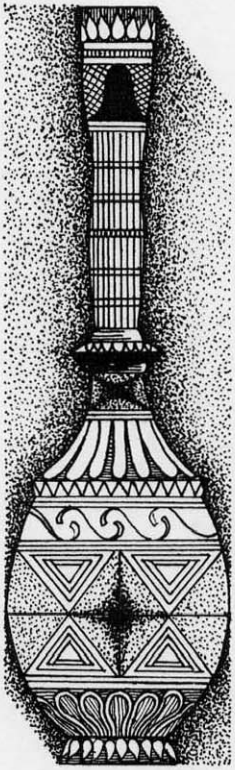
五十数年の歴史と共に
七千余人の幼児が巣立っていった
この　ひろはたようちえん

二十一世紀をになう
子どもたちが
きょうも　元気にかける
がんばる子を　めざして

昭和53年１月１日／編集・発行／岡崎市教育委員会



（寒さに負けず　走る子ら―広幡幼稚園）



——教育随想——

科学する心

井口洋夫

小中学校の教育は毎日毎日がこれ真剣勝負だなあとつくづく思う。

「これも知りたい。」「あれも知りたい。」とする知識欲旺盛な児童・生徒に対する授業は、丁度白紙に墨で字をかくように、その瞬間瞬間に、どんどん吸収され、知識となって頭の中に刻まれて行くからである。この旺盛な知識欲を満たさんとするためか、年々教科書の内容は充実し、さらに完全を期するためか、盛り込まれる教材は、消化不良になる程にもなった。そして、いまの問題は、内容の精選とゆとりある授業時間の組立てのために、その簡素化に向けて歩が進められている。私はそれに大賛成である。

戦前（或いは戦中と言うべきかも知れないが）の教育を受けた者にとって、現在の小中学校の授業内容はむつかしいことが多い。恥ずかしい事ながら、私自身天気図の読み方を知らない。星の名前は、学校で一度も教わったことはない。楽譜の読み方は中学校時代名教師（城ヶ島の雨をつくられた梁田貞先生）に教わったが、全く身につかなかった。そして戦後ゲルマニウムのトランジスタの発明で開発の幕が切って落されたＩＣ回路の発展は、専門以外の者にとっては、必死で勉強してもなかなか追いつけない程進歩がはげしい。所が、最進の充実した教育を受けた子供達をみていると、楽譜を自由によんで楽器を演奏し、一寸理科に強い生徒は、ＩＣ回路をいじって電子計算機を組立ててしまう。そして、親として戸惑いを感じつつも、電卓の普及を止むを得ないものとして、黙認している昨今である。

われわれが一年かかって得た知識を、一か月で、或いは十日で吸収できる環境である。この面からは、最近の生徒達は非常に恵まれていると言う事が出来よう。

しかし、この恵まれた環境だけで、果たして「科学する心」が育ってくれるだろうか。と言うのは、「科学する心」とは、種々雑多な現象から、その本質的なものを抜き出す能力を養うことではないかと思っているからである。

身近な例として、電卓を使えば、その表示板の桁数だけ、数字が並ぶ。しかしわれわれが必要なのは、有効数字である。その表示板に表われた数字の内で、どこまでを、自分の必要としているかを判断するのは、電卓ではなく、操作している人、その人であり、この判断の積重ねが「科学する心」を養って行くのではあるまいか。

これによって、単に算数や理科の分野のみでなく、社会にしろ、国語にしろ、知識欲を満たすのみでなく、物事の軽重を正しく理解し、現象の本質を掌握する習慣を生徒たちが、是非、身につけてほしいと願う今日この頃である。

（分子科学研究所）

O君、早く治って

藤井陽子

気がやさしくて、思いやりのあるO君が、扁桃腺手術のため、一週間入院することになった。

事前に宣伝がゆき届いていたとみえ、私が一言もいわなくても、O君の入院はクラス中に知れわたっていた。

入院して二、三日たったある朝、Y君が、十通ばかりの手紙を出し、

「先生、これ預って。」

といって持って来た。

私は、何かしらと思い、こっそり手紙を読んでみた。すると、どうだろう。それはO君へのお見舞の手紙なのだ。

後で、その手紙をどうするの、と聞くと

「ぼく、お見舞に行ってあげる。みんなにも手紙書いてもらっただよ。」

と、Y君が顔をほころばせた。

いつのまに書いたのか、私は一言もいわないのに……。

O君が退院して数日してから、O君のお母さんから電話がかかってきた。みんなが大勢でお見舞に来てくれてうれしか

風光明媚な日本の山水も、松を除いてその良さは語れない。日本三景はいずれも松の美観であり、深山幽谷の紅葉も松の緑を基調にして映える。日本画の美に松はなくてはならないものであろう。

松は日本人の心を育ててきた。昔から松は神聖視され、祭事に添えられ、また慶びの友となってきた。正月の門松や松竹梅……、これも、松が霜雪に耐え、常に千年の緑を保つところに永遠性を見出した、日本民族の思想の現われであろう。これほどに日本人の心の中にとけ込んでいる松は、日本人の心そのものと言っても過言ではないであろう。

松の仲間は、世界中に約百種ほどあると言われる。そのうち、日本には、アカマツ・クロマツ・チョウセンマツ・ゴヨウマツ・ヒメコマツのハイマツの六種が自生する。岡崎地方に自生するのはアカマツ・クロマツの二種である。アカマツとクロマツは、葉でよく識別できる。細く弱々しい方がアカマツである。なお、山地には「アイグロマツ」と呼ばれる、両種が交配した雑種の松も多く見られるが、アカマツ・クロマツのいずれに近いかは、いろいろ程度が違っていてわかりにくい。

日本的に見ると、アカマツは北は北海道から南は九州までの内陸に最も普通に見られる松であるが、クロマツは青森県を北限とし、海岸地帯に多く自生する松である。岡崎地方においても、自然の状態の山地にはアカマツが多い。しかし、平地にクロマツが多いのは、何か、岡崎地方の過去の自然を語っているような気がしてならない。

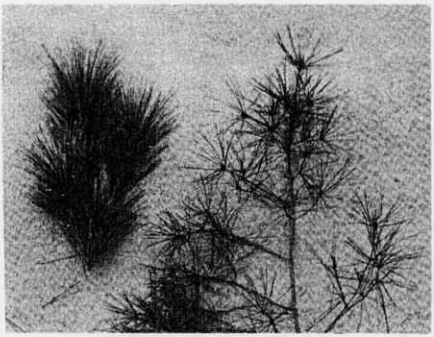
岡崎には市民に愛されている松が多い。岡崎城の松、旧東海道の並木の松、そして、新しくできた太陽緑道の若松……。岡崎の『環境保全調査』の対象となった幹の太さ一、五メートル以上の巨本二八七五本のうち、一二一九本が松であり、その中で『郷土の名木百選』に選ばれた松は二二本であった。このことからも、岡崎の先人が如何に松を友として愛してきたかがうかがい知られる。

松の中でも、この地方のクロマツは、ミカワクロマツと呼ばれ、全国に愛好家が多い。ミカワクロマツの特徴は、葉が太く、短かく、樹皮は大きく深く亀甲状にさけ、枝張りがよく、景観見るからに豪壮雄大で、クロマツの品種の中でも最も男性的な松である。何か、徳川三百年を築いた三河武士の姿を思わせる。

岡崎の松の代表を『郷土の名木名鑑』から選ぶならば、やはり福岡小学校校庭の「土呂陣屋の松」を筆頭にあげたい。これは、家康公によって永録七年（一五六四）、土呂に陣屋が置かれて以来四百年余を生き続け、なおその樹勢、樹形ともすばらしく、江戸の往時を偲ばせるものがある。その他、代表的なものとして、上青野町本光寺の大笠松、中之郷町浄妙寺の一本松、小呂町の一本松などの巨樹をあげることができる。

私たちは、これらの松を、日本人の心。岡崎人の心のふるさととして、いつまでも大切に守り育てていきたいものである。

（連尺小　矢田　敏行）


クロマツ（左）とアカマツ（右）

祭りをよそに

石田明道

新人戦も近づき、練習にも熱が入ってきたころのこと、

「先生、あしたクラブありますか。」

「あたりまえだ。」

と、どなりつけた。「あしたは、奥殿町の祭りだで……。」という会話が小耳に入ってくる。そんなことは知りつつも、いっさい無視。

つぎの日、九時集合のはずなのにまだ練習を始めていない。怒る気力もない。黙って練習風景を見ている。元気が出ない。花火は、ドーン、ドーン、と鳴っている。空は真っ青、山は紅葉、生徒は時間の経つことだけを待っている。

コートに親子づれが来て見ていた。

「へただねえ。フォームが悪いねえ。」

「A中学と比べて、どちらがうまい。」

「A中学にきまっとるよ。」

耳が痛いことばだ。「畜生。今に見ておれ。」と、心中おだやかでない。

「さあいくぞ。いいか。」

こちらがエスカレートすると、生徒も目つきが変わってくる。いつのまにか祭りのことは忘れたようだった。

かくしてわが男子庭球部も、新人戦で三位をとることができた。（香山中）

ったという感謝の電話だった。自分勝手で思いやりに欠けると思っていた三年のやんちゃな子どもたち。何だか目頭が熱くなるのを覚えた。（本宿小）

独楽

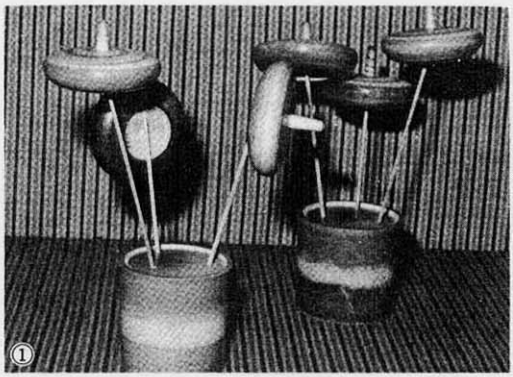
もういくつ寝るとお正月
お正月には凧あげて
独楽をまわして遊びましょう

と歌われる独楽は、奈良時代以前、中国から高麗を経て伝来した遊びで、宮中の神仏会や相撲節儀の余興として行われたものだった。その後、平安時代には、貴族の遊びになっていたことが、『大鏡』に見えている。

南北朝のころには、庶民の子供の間に独楽遊びが広まったらしく、『太平記』にその記述がある。

江戸時代、元禄のころになると、歯みがきを商う大道商人が客寄せに、独楽の曲芸（曲独楽）をして大当りを見せるや、独楽遊びは庶民の間に大流行し、寄席などでも盛んに興行された。熱狂的な独楽遊びの流行は、ついに幕府が独楽興行の禁令を四度も出すほどであった。この禁令の結果、曲独楽にかわって、競べ独楽がもっぱら行われるようになって、今日にいたっている。

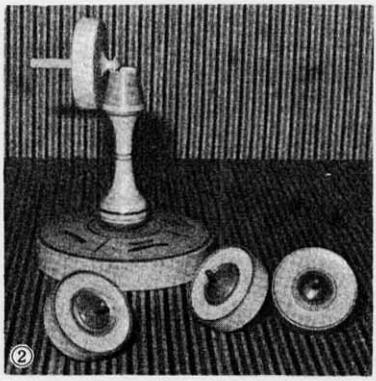
「独楽小史」このつづきが、わたしたちに託されている。



①

①手品ごま

曲芸師の皿まわしのように、ひとひねりで、棒の上で回り続ける。勢いがなくなっても、底がえぐられているので、落ちることはない。



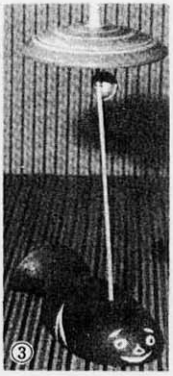
②

②当てごま

軸の上で回わされた一つのこまが、その勢いを失ってひっかかって止まる。その時、こまの軸が台座に書かれた位置を示す。いわば、和製ルーレットといったところ。

けんかごま

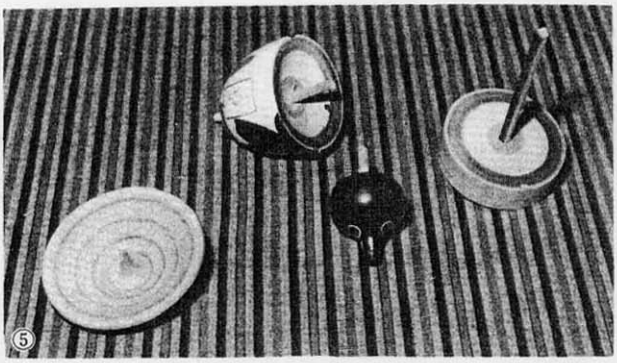
ひもで回し、互いにぶつけ合って勢いを競ってあそぶ。



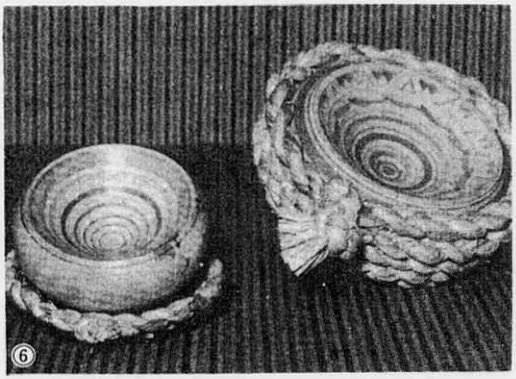
③

③曲ごま

手品ごまと同じように、くじら型の台座から立てられた棒の先で回る。棒に付けられた鈴は、こまが回るとともに鳴り出す。これは、潮吹くくじらに見立てたものである。



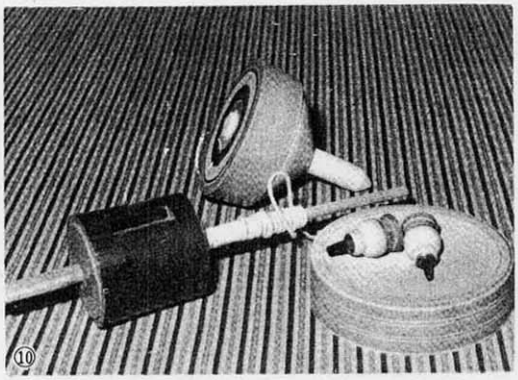
④動物ごま
このたぬきの置物は、四つの様々なこまを組み合わせたものである。
⑤差し込んである軸を抜けば、一つ一つが、こまとして回る。



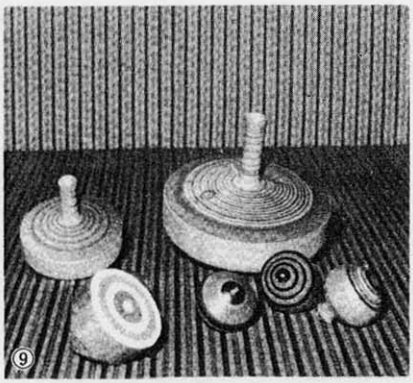
⑥かぶずくり（皿ずくり）
こまの中では、大きさ、重さともにジャンボで、縄を使って回す。

⑦八角ごま
八角にけずられた胴体には文字が書かれている。回り終わると、倒れて占いやすごろくの遊びができる。

⑧ひねりごま
どこでも、だれでもが手軽に楽しんでいるこま



⑩うなりごま
ひもで勢いよく回すとブーンとうなる。
相撲ごま
力士の格好をしたこまを、土俵上で回す。二つのこまがぶつかり合って、一方が土俵外へはじき飛ばして勝負する。



⑨鞭ごま（たたきごま）
棒の先につけたひもで、こまの横腹をたたいて回す。

（資料提供者**加藤庄一氏**を囲んで）

教育日々

機器と人間と

岩津中　本田亢子

文明が発達していろいろな教育機器が登場し、現代はまさに教育工学時代ともいえる。

わが英語科に関しても、TVあり、VTRあり、LLあり、テープレコーダー、OHP等々洪水の如く機器が押し寄せてきた。これらの文明の利器をどのように受けとめ、どのように対処するか、これが当面の問題である。

岡崎市の全中学校にLLが設置されて早や七年、機械にふりまわされたり、試行錯誤を重ねたりしながらも、その利用は着実に行なわれている。学習過程の位置づけもReviewでのPattern PracticeをPerceptionやOral Comprehensionを中心にAural General Reviewで行なわれている。

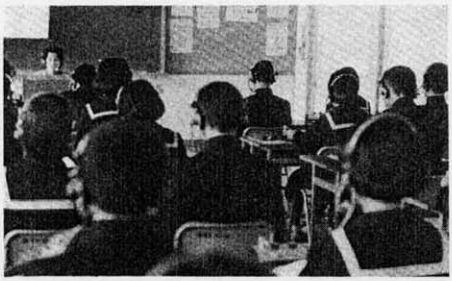
機械にもそれぞれ特徴がありやはりそのものだけがもつ特性を生かすべきだと私は考える。

私は最近、LLについてhearingの分野でのSoftwareがもっとないだろうかと思い、いろいろ探してみたが、結局現場の生徒に即したものは自らの手で作成する以外にないことがわかった。学習する上に大切なことは興味づけである。TV学習のように多面性があり、生徒のよろこぶものはよいが、わけのわからない音声の流れに身をまかせ、意味をキャッチするのは至難のわざである。そこで生徒たちの身近な生活場面に即したスキット風なものをつくってみたが、これなどは割合、生徒に歓迎された。

聞く、話すという音声によるCommunicationにおいては、聞く力が何よりも重視されるものといえる。Sound imageを育てることが、これからの英語教育にどれほど要求されていることか。そのために我々人間教師は効果をあげるために機器を駆使しなければならない。また機器の奴隷になってはならない。

昨年度、英検四級団体賞を受け、また某出版が主催するHearing Contestにもよい成績を得ることができた。英語教師のひたすらの研究とチームワークによって、生徒は伸びて行くものだという自信もついた。

まだまだこれから開拓すべきものが多い。教育工学時代の教師の仕事ははかり知れない。



自転車免許テスト

男川小　海藤卓夫

三年生の男の子、

「先生、こんど自転車の免許テスト、いつ？」

彼は、私と顔を合わすたびに、こうたずねた。

本校は、校区内を国道一号線や、県道岡崎・設楽線など、交通量の多い道路が貫き、しかも、国道一号線以外は、歩車道の区別がない。交通環境としては、子どもたちにとって危険極まりないものである。

そんなわけで、本校では、免許テストに合格した子だけに自転車に乗ることを認めている。

だから、免許が取れる三年生になると、テストのあるのを待ちこがれているのである。

いざテストということになると、子どもたちは、私たちが車の免許テストを受けるのと同様に、あるいは、それ以上に緊張し、真剣になる。しあわせにも「合格」と聞かされると、その喜びはたいへんなもので、とび上がらんばかりにはしゃぎまわる。また、不幸にも不合格と知らされると、シクシクと泣き出す子まで現われる。わずかに合格点に及ばない場合など、

「かわいそうだから……」

と思うこともあるが、それがあだになって、とりかえしのつかないことになってはと、

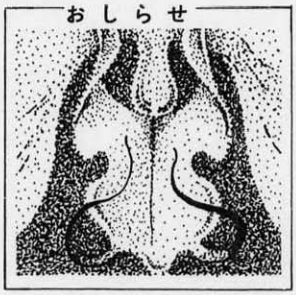
「もう少しだ。今度やる時は、きっと合格できるよ。」

となぐさめてやるのである。

また、テストを実施するだけでは子どもたちが練習する機会がないので、中庭にロープを張ってコースを常設し、自転車を十台ほど準備して、放課に自由に練習できるようにしている。

今は、毎日、昼の放課に、この中庭に設けられたテストコースで、テストを行なっているが、限られた時間なので、一日にせいぜいひとりかふたりしか合格できない。子どもたちにとっては、なかなかきびしい試練である。

こうして手に入れた免許証を身につけ、白いヘルメットをかぶった子どもたちが、自転車を乗り回しているのを見るたびに、私は、子どもたちの無事故を祈っているのである。



昭和五十二年度
県教委教育論文審査結果発表

岡崎市の教育論文募集に先立って募集された県教委の研究論文審査で昨年度に続いて今年も十名の先生方が入賞した。

応募点数、入賞点数とも他を断然引きはなしていることは当市の教育水準の高さを示すものとして意義深い。

喜び溢れる入賞者は左記のとおりである。

◆最優秀

「学級通信を軸とした学級経営」＝岩津中・中尾剱一、佐伯友一、牧野好博教諭

◆優　秀

「豊かな読みを育てる指導―イメージ創造を授業に求めて」＝岩津中・大野清子教諭

「理科TV番組を効果的に活用する理科学習のあり方」＝愛宕小・山本禎夫教諭

◆佳　作

「数学科的な考え方を育てる算数科指導」＝六南小・江村力教諭、「働きかけあう道徳生活」＝男川小・鈴木健六教諭、「楽しく読書する子どもたちを求めて」＝六名小・市川起佐子、「中学校におけるゆとりの時間の実践をふまえた生徒指導とそれを補う学校図書館づくり」＝葵中・山本宣平教諭、「意欲をもって学ぶ生徒の育成」＝福岡中・牧内映雄教諭、楽しい英語の授業を求めて―自作TV番組の制作と活用をとおして」＝美川中・加藤忠彦教諭、「道徳教育の実践と深化をめざして」＝六ッ美中・道徳研究部。

【寄贈刊行物・資料】

◆大門のあゆみ

岡崎市立大門小学校編

昨年四月三日開校の大門小が一年六か月後、見事な研究会を披露した。この間の苦しくもまた楽しい学校づくりを豊富な写真で編集紹介した重貴な体験記録。変形A5判一〇九頁

◆自主性を高めひとりひとりを伸ばす指導

岡崎市立香山中学校編

学校保健活動八年、去る十月十四日、県一位の保健活動優良校として認められた本校がその輝やかしい実績を実践記録として残したもの。B5判五十一頁。

長距離走のシーズン開始
各種目に好記録生まれる

■52年度西三中学校新人陸上記録会（11月3日、安城競技場、関係分のみ三位まで）

【男子】▽百㍍①荻野竜也（葵）▽八百㍍①柴田真人（常磐）③伊藤利洋（葵）▽三千㍍③松本久（甲山）▽百㍍H①石川誠司（甲山）▽八百㍍R①葵②矢作▽走幅跳①長谷部誠（葵）②荻野竜也（葵）▽走高跳①中根龍雄（葵）▽砲丸投①青山徹（東海）

【女子】▽二百㍍③新美由香（甲山）▽八百㍍①酒井広美（甲山）③斉田良美（矢作）▽八十㍍H②犬塚幸子（六ッ美）▽走幅跳②小森緑（矢作）③新美由香（甲山）▽砲丸投②大須賀倫子（東海）

■第9回市民マラソン大会（11月13日、県岡崎総合運動場小中関係分八位まで）

【小学生男子】千㍍①柴田享志（矢東）②武井繁樹（矢東）③鈴木康恭（根石）④刈谷良稔（梅園）⑤杉本孝司（矢南）⑥浅井隆（六北）⑦小久保光彦（三島）⑧前田敏己（三島）⑨神尾浩孝（矢北）⑩梅本岳繁（根石）

【中学生女子】千㍍①杉浦幸子（甲山）②斉田良美（矢作）③杉崎仁美（甲山）④酒井広美（甲山）⑤中根幸代（常磐）⑥中根美佐子（常磐）⑦村瀬智美（岩津）⑧新美由香（甲山）⑨沢田喜代美（甲山）⑩兵藤結花（福岡）

【中学生男子】三千㍍①山本鎮（東海）②浅山仁（東海）③兼子薫（甲山）④柴田真人（常磐）⑤天野国男（東海）⑥松本久（甲山）⑦脇田貴司（矢作）⑧藤原勝利（岩津）⑨梶千尋（常磐）⑩鈴木博（東海）

■第27回西三中学校長距離継走大会（11月26日・県岡崎総合運動場・関係分のみ十位まで）

【男子二千㍍×八】④東海⑦甲山⑨常磐⑩北山B

【女子千㍍×五】①甲山A⑩甲

※いずれも小六年生・中三年生

●52年度健康優良児童・生徒						●52年度よい歯の児童・生徒				
区　分	小中別	男　子		女　子		小中別	男　子		女　子	
岡崎一	小	福岡小	岩柿利幸	根石小	八田美好	小	六南小	森田孝治	付　小	深谷百合子
	中	岩津中	大崎治孝	福岡中	青山富美	中	岩津中	竹内好典	岩津中	山田直子
準岡崎一	小	美合小	山本秀典	六北小小	村越香代	小	六北小	本田修一	福岡小	岩瀬明美
		藤川小	石原靖士	付属小	野本晴子		矢　小	渡辺一浩	藤川小	石黒直子
	中	常磐中	倉地耕治	葵　中	竹内晶子	中	矢作中	平　正己	南　中	上原麻里
		葵　中	高橋雅一	六ッ　中	鈴木由佳		河合中	鈴木光明	葵　中	浅井麻里

安藤恒夫先生頌徳碑

安藤恒夫先生は、明治三十二年、明大寺町向山六番地に生まれられた。県立二中を経て矢作第四小学校に奉職、大正十二年より二十二年間もの間、岡崎小学校で教鞭をとられた。

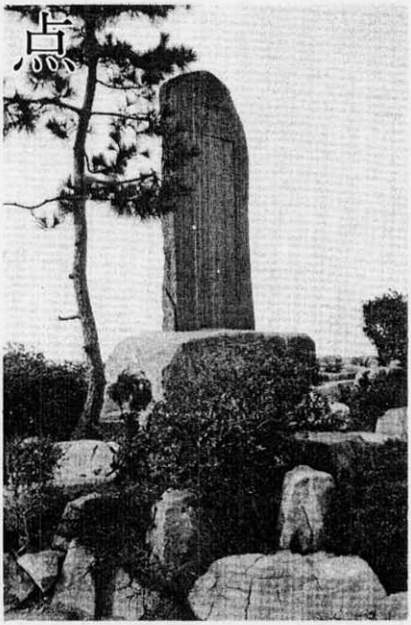
昭和二十年七月十九日、岡崎空襲の際、学校を守るため、身の危険をもかえりみず、「俺は学校へ行くんだ。」との言葉を残し家を出られた。

途中、北羽根路上で焼夷弾を腹部に受け、二十日午前三時頃享年四十六歳で殉職された。

先生の人徳を慕う教え子、父兄は、十三回忌に当たり、頌徳碑を建立した。

篆額　文部大臣　灘尾弘吉
題箋　岡崎市長　竹内京治
撰文　岡崎小職員一同
　　蓬村浅田一二謹書

昭和三十二年七月二十日建立
岡崎学区社会教育委員会
安藤恒夫先生教え子一同



所在地—岡崎小学校内

●カット　大樹寺小　香村敏之

この本を

○岡倉天心　朝日新聞社	大岡　信　¥1,200
○ロダンの言葉抄　岩波書店	高村光太郎訳　¥400
○堀もれた巨像　岩波書店	上山　春平　¥1,200
○日本人の性格　東京書籍	宮城　音弥　¥980
○深代惇郎エッセイ集　朝日新聞社	深代　惇郎　¥850
○わが子育て論　講談社	三好　京三　¥980
○教師、その仕事　岩波書店	国分一太郎　¥230
○石橋を叩けば渡れない　日本生産性本部	西堀栄三郎　¥680
○精神薄弱児　三一書房	ア・エル・ルリア　山口薫訳　¥850
○ダーウイン論　中央公論社	今西　錦司　¥340

オアシス

おとしだまはもらうもの、と思いこんでいた時代がなつかしい。ピサの斜塔で落とし玉実験をしたガリレオは、偉大な発見をした。物体はその軽重に関係なく同加速度で落下するというのだ。だが待てよ。おとしだまをはたいて軽くなった私の財布など、手を放すと落ちるどころか、飛んでいっちゃうぞ。

新年おめでとうございます。

子どもたちからのたどたどしい年賀状につい顔もほころぶ。印刷された儀礼的なものの味気なさに比べ、教え子からの便りはやはり嬉しい。すでに巣立った卒業生や社会人になった者からの年賀の余白に書かれた近況を繰り返し読む。教え子たちの多幸を祈る正月である。

「あのセブンスターの持ち味をベースに……ニコチンとタールを抑えたマイルドセブン。スムーズな……アメリカンブレンド」「この車はメインテナンスフリーでトータルサービスシステムの……」

このごろ片仮名の名前や宣伝がやたらに多いと思いませんか。いやですねえ。だって私たちは日本人ですから。

拗ねて親に買ってもらったケンパン、わんぱく坊主らと家の庭でホンコをしては取ったり取られたりしたのも、正月前後の見慣れた風景だった。

出てくる鼻水を綿入れハンテンの袖でぬぐいぬぐいしながらの真剣勝負。勝って枚数を増したときの晩など、食う飯もうまかったもんだった。